

### 宮部みゆきの初期作品における岡本綺堂の怪談文学の受容

李, 紹楠

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

82

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2019-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022127>

# 宮部みゆきの初期作品における岡本綺堂の怪談文学の受容

人文科学研究科 日本文学専攻  
国際日本学インスティテュート  
博士後期課程3年 李紹楠

## はじめに

宮部みゆきは日本のミステリー作家として広く知られている。1987年のデビュー作「我が隣人の犯罪」は同年の第26回オール讀物推理小説新人賞を受賞した。そこから、『火車』(1992)、『理由』(1998)、『模倣犯』(2001)など、現代の日本社会を舞台としているミステリー小説を多く発表し、作品の総合的評価も高い。さらに、その作品は日本国内だけではなく、海外でも翻訳されて広く読まれている。

宮部は作家としてデビューする前に法律事務所の事務員として働いていた。仕事の合間に、「右手にミステリーを、左手に時代小説をという感じで、毎日楽しく本に埋もれ」<sup>1</sup>ていたとエッセイで述べている。その読書体験の影響であろうか、彼女はデビュー以来、現代のミステリー小説だけではなく、時代小説の作品も次々と発表した。その評価は高く、1988年に発表した初の短編時代小説「かまいたち」<sup>2</sup>が第12回歴史文学賞佳作賞を獲得し、1992年に初の時代小説短編集『本所深川ふしぎ草紙』<sup>3</sup>で吉川英治文学新人賞を得ている。現在に至って、時代小説は現代小説とともに、宮部の創作活動における二つの柱になっている。

宮部みゆきの時代小説においては、その主題が常に日本の怪談文化と関連していることが大きな特徴である。たとえば、『本所深川ふしぎ草紙』は江戸時代にある本所七不思議という伝承を扱っており、その代表的な一例だ。また、短編集の『かまいたち』<sup>4</sup>には、宮部の1986年の習作に基づいて書いた「迷い鳩」と、1987年に発表した「騒ぐ刀」が収録されており、この二つの短編はのちに発表した『震える岩：霊験お初捕物控』<sup>5</sup>という作品の原型になっている。これらの作品はすべて根岸鎮衛による、怪談話を多く記録された随筆集『耳袋』から構想を得て作り上げた小説である。現在(2018年)、連載中の「三島屋変調百物語」シリーズも、百物語の遊びのモチーフを用い、現代日本のいわゆる「実話怪談」風の作品である。

なぜ宮部は怪談を描くのか。彼女のインタビューやエッセイからそのルーツを辿ると、岡本綺堂の時代小説の影響が一つ重要な原因となっていることがわかる。

宮部は子供の頃に、両親の影響を受け、読書より落語や講談などの演芸や、映画を好んでいたという<sup>6</sup>。高校以降ミステリー小説を読み始めると、スティーブン・キングと岡本綺堂の作品を知り、彼らの作品に魅了された。宮部は、「キングの作品を読んで、やっぱり自分もこういうものをいつか書きたいというのが、潜在意識に刷り込まれたのかなあ」と述べており、日本の作品だと「時代物は『半七捕物帳』<sup>7</sup>が、ああ面白いと目を開かれました」という<sup>8</sup>。怪奇現象を作品のテーマとしているスティーブン・キングはここでは措くが、岡本綺堂も特に怪談文化を好んで、名高い「半七捕物帳」シリーズの中でよく怪談の要素を取り込んでいる。また、綺堂は西洋の怪奇小説を翻訳したことがあり、宮部は「私も同じジャンルが好きなので、翻訳調の文体で江戸ものを書いた綺堂に少しでも近づきたい」<sup>9</sup>とも明言している。このような綺堂の作品に対

1 宮部みゆき「本と本の日々」『大衆文学研究』第99巻第3号(1992年12月)、pp.37

2 宮部みゆき「かまいたち」『歴史読本』第33巻第7号(1988年4月)、pp.234-276(注釈に示している作品の書誌情報はすべて初出情報になっている。)

3 宮部みゆき『本所深川ふしぎ草紙』新人物往来社、1991年

4 宮部みゆき『かまいたち』新人物往来社、1992年

5 宮部みゆき『震える岩：霊験お初捕物控』新人物往来社、1993年

6 宮部みゆき、大沢在昌「作家対談 大沢在昌のトークバトル 宮部みゆきはキツネつきである」『小説宝石』第28巻第10号(1995年10月)、pp.118-125

7 岡本綺堂によるシリーズ小説である。1917年から雑誌『文芸倶楽部』(博文館)で連載が始め、一度中断してから1934年から1937年まで雑誌『講談倶楽部』(講談社)で連載されていた。

8 宮部みゆき、長谷部史親「インタビュー 創作の秘密」『小説新潮』第47巻第7号(1993年7月)、pp.62-68

9 宮部みゆき、末国善巳「翻訳調の文体で江戸ものを書いた岡本綺堂に近づきたい(特集 宮部みゆき「時代小説」の世界; Interview 宮部みゆき)」『文蔵』第89巻(2013年3月)、pp.36-41

する愛着が多くインタビューやエッセイで語られている。

宮部の時代小説を分析するにあたって、やはり岡本綺堂の影響は避けて通れない。彼女が時代小説に描いている怪談は、江戸時代に盛んになった怪談文化そのものというより、むしろ岡本綺堂の小説を通じて再解釈された怪談文学であったのではないか。一方、宮部は綺堂の文学に近づきたいと述べながら、自らの小説に綺堂作品と大きく異なる趣向も取り入れている。綺堂の影響は宮部の作品において、具体的にどのように反映されているのか。この問題は宮部作品の原点ともかわる重要な問題でありながら、これまで十分に論じられてきたとは言えない。宮部が自らの作品において、綺堂の小説から継承したもの、そのうえで発展させたものとは何か。本研究では、宮部の初期短編集と岡本綺堂の「半七捕物帳」シリーズを研究対象として、宮部作品における綺堂の怪談の受容を詳しく論じたい。

## 1. 宮部の作品に関する先行研究

テキストを分析する前に、宮部みゆきに関する先行研究の中で、すでに指摘された宮部作品の特徴を簡単に述べたい。

まず、宮部の小説の特徴としては、舞台背景として度々江戸の下町、特に深川界隈に設定していることが挙げられる。彼女自身は東京の江東区出身であるが、時代小説を書く前には深川の歴史についてそれほど詳しくなかったとエッセイで述べている<sup>10</sup>。資料を調べる中で、「深川という土地が、当時の江戸の人々にとって、「人外魔境」のようなもの」であったと知り、そもそも深川地域は「江戸市中ではなく、従って町奉行所の管轄でさえなく、お代官さまや八洲さまの管理の下に置かれていた」とも知って驚いたという。一方、疎外されていた土地でしか生まれられない生命力もあり、江戸時代の深川は「大勢の人間が出入りし、きれいごと抜き、生の感情や欲望がぶつかりあっている町」であったろうと彼女は述懐している。このように、流れ者が多く、秩序立っているとは言えない江戸時代の深川の様相は、怪談を扱うにあたってとりわけふさわしい舞台背景といえる。

文学評論家の川本三郎が宮部作品のこの特徴を論じたことがある<sup>11</sup>。東京の下町は宮部の「生まれ故郷であると同時に」、「八〇年代以降、急激に「町」から「街」へと変化している」ところでもある。「古い落ち着きと新しい活気がぶつかりあい、きしみあう。その歪みの中で犯罪がおこる」。そのうえ、宮部が描いている下町の様相のいいところは、「これだけ事件が起こっているが、それでもなお同時に、そこには昔ながらの穏やかな日常があることである」と川本は述べている。さらに、いわゆる下町人情の優しさは宮部の現代ミステリー小説だけではなく、『本所深川ふしぎ草紙』や『幻色江戸ごよみ』のような時代小説においても一貫していると指摘している。ストーリーとしては不可解な話であっても、底流にある下町人情が常にはっきりと描かれている。

次に、登場人物の配置にも特徴が見える。宮部がとりわけ少年あるいは少女を中心に描くことは注目すべきところといえる。この特徴については、ミステリー評論家の新保博久と杉江松恋がすでにそれぞれ、現代小説を対象として論じている<sup>12</sup>。新保は、「宮部作品でしばしば少年の視点が採用されることは、売春まがいの事件が扱われるようなとき浄化装置として働く」と指摘している。「一番の成功例」として小説『魔術はささやく』を挙げており、そこに登場した少年の視点にある優しさが、一種の浄化機能を持っているという。杉江は、戦後の児童書文庫に現代ミステリー小説も含まれていたことを指摘した上で、宮部みゆきを「デビュー当時から「子供の眼」を意識していた」「希有な存在の作家」と評価している。また、彼は新保の評論を踏まえ、「少年（少女）が大人も絡んだ事態を「自力救済」しようとする、という物語の構造は、以降も宮部作品に頻出してくる」ことを指摘している。若い登場人物たちが「提示された事実を受け入れる際、それを理解できるように自分の言葉に置き換え」る、その過程は新保のいう浄化の本質であると分析している。

一方、新保は『魔法はささやく』に登場した少年に優しさが備わっていても、事件解決において無力であるという。無力の主人公像が描かれた理由は、「主人公（作者）が自己の限界を心得ているからだ」という。『魔法はささやく』のほかにも新保は『火車』を例としてあげている。主人公の本間刑事が最後に犯人の話聞くことしかできず、「そこで小説は終わるが、そこから読者自身が物語を紡げるような錯覚を楽しめるあたり」、宮部は「聞き手が一緒になって盛り上げられる物語の語り部」に近いと論じている。よく登場する少年少女の主人公像を含めて、宮部の作品は「きょうだい寝物語」を作るような雰囲気醸し出しているという。

新保と杉江は主に宮部の現代ミステリー作品を対象として論じているが、少年少女の主人公像は宮部の時代小説において

<sup>10</sup> 宮部みゆき「いかがわしくも愛おしい町、深川」『小説新潮』第47巻第2号（1993年2月）、pp. 405-407

<sup>11</sup> 川本三郎「ミステリー小説の東京(1)宮部みゆきと下町風景」『東京人』第14巻第5号（1999年5月）、pp. 110-115

<sup>12</sup> 新保博久「魔術はささやく——宮部みゆきの「妹の力」」『ミステリー読書案内 ニッポン篇』シネマハウス、1996、pp. 42-46  
杉江松恋「宮部みゆきの視線の先にあるものは」『ハヤカワ ミステリマガジン』第58巻第3号（2013年3月）、pp. 147-151

もよく見られる。最も代表的な一例は、不思議な能力を持つ少女お初を主人公とする「霊験お初捕物控」シリーズであろう。お初は普段兄嫁と一緒に料理屋を切り盛りしているが、犯罪事件の情景を感じ取る能力を持っているため、よく事件の捜査を手伝う。ほかに、小説『あかんべえ』には幽霊が見える少女おりんが登場する。ただし、現代ミステリーに描かれる無力の少年少女とは異なって、時代小説の中で、宮部が描く若い主人公たちには活発な一面もある。たとえば、「霊験お初捕物控」シリーズの原型となる短編「迷い鳩」<sup>13</sup>では、主人公のお初は自ら事件を調査し、真相を解明する。

このように、宮部みゆきの時代小説には、江戸の下町を舞台とすることにこだわりをみせると、よく少年少女の視点を用いることという二つの大きな特徴が見出せる。本論で研究対象とする短編集『本所深川ふしぎ草紙』と『幻色江戸ごよみ』は、宮部の原点を代表する初期作品であり、この二つの特徴が明確に表れている作品でもある。二つの短編集におけるモチーフや人物は、お互いに共通しているところが多いだけでなく、宮部のほかの作品との類似点も見られる。繰り返して扱われる要素を通じて、宮部の時代小説の原型を示していると考えられる。以下において、研究対象として扱う各短編集の内容を簡単に紹介する。

## 2. 本稿の研究対象

本稿で研究対象として取り上げた宮部の作品は、短編集『本所深川ふしぎ草紙』と『幻色江戸ごよみ』である。

『本所深川ふしぎ草紙』は、宮部が1989年から1991年まで『別冊歴史読本 特別増刊』で発表した六つの短編と一つの書き下ろし作品を収録しているものである。短編のタイトルには本作のモチーフである本所七不思議の伝承をそのままに用い、「片葉の芦」「送り提灯」「置いてけ堀」「落葉なしの椎」「馬鹿囃子」「足洗い屋敷」「消えずの行灯」となっている。本所七不思議を描くという発想について、文芸評論家の池上冬樹が宮部自身の談を伝えている<sup>14</sup>。彼女が偶然に墨田区の人形焼の店「山田家」で、包装紙に印刷されていた「本所七不思議」の漫画を読んだことが、この小説を書くきっかけであったというものである。現在では、このエピソードは「山田家」のホームページにも載せられている<sup>15</sup>。その説明文によると、その包装紙は「漫画家で江戸文化研究家の宮尾しげを氏の筆による」もので、「江戸の伝承話「本所七不思議」を題材としている」とする。ところが、小説にはそれらの怪異たちは登場しない。宮部は、本所七不思議の事象に人為的犯罪事件を取り合わせ、その上で深川地域を管理する岡っ引き・茂七の親分をキーパーソンとして七つのストーリーを繋いでいる。

『幻色江戸ごよみ』は『本所深川ふしぎ草紙』と異なり、由緒がある怪異の伝承は扱わないものの、幽霊や祟りなどの超自然現象を描いている作品である。例を挙げると、第一話の「鬼子母火」では、商家に奉公する少女の母が流行病で亡くなって火葬されたが、その霊が煙の形で現れて娘を守ることが描かれている。「第四話 器量のぞみ」には、失恋の悲しさで相手の男性とその家族に祟る女性の霊が登場する。また、ストーリーとして原因と結果を論理的に構成する短編もあるが、物語の謎を解明しないまま終わる短編もある。たとえば、日本の怪談によく見られる付喪神のモチーフを主題としている「第三話 春花秋燈」は、ただ老人が怪談を語っているだけで、その怪異の真相は未解明のままに残されている。本集に収められている全12話の作品には明らかな関連性がなく、『本所深川ふしぎ草紙』の茂七のような全編に登場する探偵役もいない。怪談集の性質が色濃い作品である。一方、この作品の題名にあるキーワード「ごよみ」が明示しているように、12の短編のストーリーは近世江戸の季節的な事象を巧みに取り込んでいる。必ずしも重要ではないが、食べ物や祭りなどの風物詩が各話に描かれている。

以上のあらすじだけから見ても、すでに「半七捕物帳」シリーズとの類似点がいくつか見られる。「半七捕物帳」は、明治時代に新聞記者である主人公「わたし」が、半七という江戸時代の岡っ引きであった老人から事件の話聞き、内容を記録する形で展開している。捕物帳というジャンルを確立したと言われているこの作品に、シャーロック・ホームズシリーズと中国の伝奇小説の影響が多く見られることは、すでに多くの先行研究によって指摘されている<sup>16</sup>。それにしても、「半七捕物帳」の最も大きな魅力は、詳細に描かれている幕末期の江戸風俗にあるといえる。一方、綺堂が記録した江戸は、永井荷風が描いていた粋な江戸風情と異なって、より素朴で現実的である。半七親分が体験した事件は必ずしも下町地域で起こったものばかりではないが、ほとんど江戸の下層社会に接触している。江戸の華やかな一面より、簡素の町人生活に注目することは、下町人情を描き続ける宮部の作品にも見られる。そのような江戸の町において、岡っ引きが不思議な現象を解明す

<sup>13</sup> 宮部みゆき「迷い鳩」『別冊歴史読本 特別増刊』新人物往来社、1991年

<sup>14</sup> 池上冬樹「解説」『本所深川ふしぎ草紙』新潮文庫、1995年、pp. 257-266

<sup>15</sup> 山田家の人形焼き <http://yamada8.com/product.php> (参照：2018年7月22日)

<sup>16</sup> 実際、「半七捕物帳」シリーズの第一回「お文の魂」には、綺堂は自ら半七を「江戸時代に於る隠れたるシャアロック・ホームズであった」(『半七捕物帳 初出版集成 第1巻』三人社)と形容している。これはその影響を反映する最も明確な例であろう。

る。綺堂も宮部も、同心ではなく、岡っ引きを主人公にしたのは、より町人の目線に近づけるためだろう。

宮部の作品と「半七捕物帳」には類似性がある一方、当然ながら、異なる特徴もある。次節において、両者の関係性をテキストに基づいて詳しく分析する。

### 3. 継承された構造と異なる発展

岡本綺堂は小説家である前に、劇作家として知られている。彼は少年時代から講談や落語、歌舞伎など伝統芸能に親しんでいた。彼の随筆「高坐の牡丹燈籠」<sup>17</sup>には、少年綺堂が三遊亭円朝の話術に感服する心境が詳しく記されている。また、「修善寺物語」<sup>18</sup>と「番皿町屋敷」<sup>19</sup>のような歌舞伎の名作も著した。その経験の影響もあるだろうか、彼が45歳から始めた「半七捕物帳」の連載にも、江戸の芸能に対する愛着が散見される。歌舞伎の演目や登場人物をストーリーの背景に取り入れることはもちろん、半七のセリフにも江戸の芸能を語る部分が多くある。

日本文学研究者の横山泰子が著作『綺堂は語る、半七が走る』において、綺堂の伝統芸能の体験について詳しく論じている<sup>20</sup>。横山は、江戸時代の怪談は多様な形式で表現されていたが、その中で綺堂は特に「聴く」ことに魅力を感じていたと指摘している。「子ども時代に周囲の大人たちから怪談を聴き、円朝の怪談斬を楽しみ、菊五郎の歌舞伎の舞台でも語りの場面に心惹かれた」綺堂が、「聴覚型の怪談作家になったのは自然な道筋だった」と論じている。また、「半七捕物帳」シリーズは、主人公の「わたし」が半七老人から話を聞く形で展開しているため、この「聞き書き」のスタイルはまさに「聴覚型」作家の特性であると、横山は述べている。

宮部も綺堂と似たような子供時代を過ごした。洋画好きの母から映画の内容をいろいろ聞き、「母の口がビデオみたいなもの」<sup>21</sup>という体験もあり、音声としての物語に深く馴染んでいた。「語る」ことに親しんで、「聴く」ことを楽しんでいた宮部が書いた作品は、綺堂の小説と同じく「聴覚型」の側面を持っているといえるであろう。

この作風に由来する特徴は、宮部作品に細かく描かれている様々な音に反映されている。日本文学研究者の大國真希が、すでに音に着目して宮部の作品を論じている。現代女性作家読本シリーズ第2期の『宮部みゆき』巻において、大國は「耳から内在化される七不思議—「本所深川ふしぎ草紙」—」という評論を発表した。『本所深川ふしぎ草紙』を対象として、各短編に音の描写が散りばめていることを指摘し、宮部が「聴覚」の描写を強調するという特徴を提示している。このように、小説の中の本所七不思議は「人々の耳から入るものとして、耳から聞く物語として成立するように描かれている」。つまり、「怪異の音、七不思議を生成する音は、物語のなかで、現実のものなのかそうでないのか半然としなくとも、中心人物の耳を通して内在化され、意味のある音として受け止められる」ことによって、怪談は成り立つとする。

音を通じて物語を内在化する過程は、まさに講談を聞く体験と共通している。講談師は語りで聴衆に同じ情報を伝えるが、多数の聴衆はそれぞれの感性によって、自分の中で異なる怪異を造形する。聴覚を重視する描き方は、『幻色江戸ごよみ』の中でさらに大胆な形になっている。「第三話 春花秋燈」と「第八話 小袖の手」は、読者に怪談を「聴く」楽しさを直接に享受させる短編である。二つの物語は第一人称で語られており、さらに地の文を排除して全編を登場人物のセリフとして描いている。文章も登場人物の話をそのまま記録したような口語体になっている。「第三話 春花秋燈」は古道具屋の主人が接客する場面から始まり、「第八話 小袖の手」はある母が娘に怪談を語りだす場面に設定している。また、読者の代理といえる客や娘の人物像は直接に描かれることが少ないため、語り手が読者に話しかけているような錯覚も生じる。「半七捕物帳」の「聞き書き」スタイルにおいて、読者は「わたし」の目線を介して半七の語りを体験するが、宮部はさらに「わたし」のような仲介のツールを省略し、読者をストーリー中に引きずり込む。このような臨場感を強調する一人称の文体は、現代で流行しているロールプレイングゲームのテキストを想起させる。宮部は三十代の時、一時期に病気で仕事できなくなり、気分転換のためにテレビゲームを始め、最初にクリアしたのはスーパーファミコンのロールプレイングゲーム『トルネコの大冒険』であるという<sup>22</sup>。そこから宮部はテレビゲームに夢中になり、ロールプレイングゲームの略称を直接にタイトルにした小説『R.P.G.』<sup>23</sup>も発表した。この二つの短編は、綺堂の伝統的な語りに基づいて、宮部がその魅力をより現代的な方法で実践した作品という見方も可能であろう。

17 岡本綺堂「寄席と芝居 一 高坐の牡丹燈籠」『随筆 思ひ出草』相模書房、1937年、pp. 217-224

18 初演：1911年5月、東京明治座

19 初演：1916年2月、東京本郷座

20 横山泰子「第三章 怪談を「読む」「聴く」「見る」『綺堂は語る、半七が走る 異界都市 江戸東京』教育出版社、2002年、pp. 76-111

21 同注6

22 谷原章介、宮部みゆき「出張版 谷原章介の「あの作家に会いたい」(第二回)』『早稲田文学』第15号(2016年5月)、pp. 154-161

23 宮部みゆき『R.P.G.』集英社文庫、2001年

「聴覚型」という構造的な類似点以外に、宮部作品の具体的な内容においても、「半七捕物帳」シリーズの影響とみられる点が多くある。実際、宮部の作品の中で、明らかに半七を彷彿とさせる人物もいる。それは「回向院の茂七」と呼ばれている岡っ引きの茂七である。彼は宮部の作品群においても大きな人気のある登場人物の一人といえる。彼は『本所深川ふしぎ草紙』で脇役として初めて登場したが、そのあと連作小説『初ものがたり』<sup>24</sup>の中では主人公として描かれている。2001年に、「茂七事件簿 ふしぎ草紙」という時代劇もNHKによって作られ、同年の6月から9月まで全10回で放送された。

ここで、半七と茂七の登場の場面から、人物像の共通点を見てみよう。「半七捕物帳」は主に半七老人の話記録する形で展開しているが、第一話の「お文の魂」において、聞き手の「わたし」はまだ半七と面識がなかった。第一話の内容は、まだ12歳の「わたし」がKおじさんから聞いた内容である。そのため、シリーズの中心人物である半七の初登場は、Kおじさんによって語られている。その話の中で、Kおじさんは友人の宅に出てきたお文という幽霊の話聞き、その真相の調査を手伝うと言いついた。しかし、手掛かりが少なく、なかなか進展しないところで、Kおじさんは半七の親分と出会った。

「これは江戸川の若旦那。なにをお調べになるんでございます」

笑いながら店先へ腰を掛けたのは四十二三の痩せぎすの男で、縞の着物に縞の羽織を着て、だれの眼にも生地の堅気とみえる町人風であった……かれは神田の半七という岡っ引きで、その妹は神田の明神下で常磐津の師匠をしている。Kおじさんは時々その師匠のところへ遊びにゆくので、兄の半七とも自然懇意になった。<sup>25</sup>

Kおじさんは半七と会ってから、「いっそもかも打明けて彼の知恵を借りることにしようかと思」い、友人の家にある怪異の事件を半七に話した。半七は「二、三日の内にきつと埒をあけてお目にかけます」と承諾し、実際に本当に素早く事件を解決した。

茂七の方は『本所深川ふしぎ草紙』の「片葉の芦」で初めて登場する。ストーリーの中で、茂七は最初に主人公の彦次の前に現れず、ただ人々の話の中に噂されている。

「娘がやったって、そう言うのかい？」

さらに低い声がささやいた。

「回向院の茂七は、どうやらそうにらんでいるらしいぜ」

回向院の茂七は、本所一帯を仕切っている古顔の岡っ引きである。

茂七は、彦次が好意を持っているお美津を殺人犯と疑っている。お美津の疑いを晴らしたい彦次は、ある手掛かりを思いついた。しかし、彼一人の力は限られているもので、彦次は茂七に助けを求めるために会いに行く。

茂七は今年五十になる。十手を預かって、二十五年になる。彦次の話を聞き終えると、すっかり禿げ上がった頭をつるりと撫でて、

「やっぱり下駄屋か」と、つぶやいた。

「下駄？」

「桐の香りがしたと言ったろう。それに、藤兵衛はいつも、下駄だけは自分でどこかへ買いに行っていたそうだ。あつらえ物でな。なんせ、大男だったからなあ」

彦次が話したわずかな手掛かりから、茂七はすぐに事件との関連性に気付いた。「それから半月もたたないうちに」、茂七は下駄という手掛かりから真犯人を突き止めた。

茂七と半七の名前もすでに似た二人であるが、年齢や岡っ引きとして発揮される優秀な推理力も共通している。それに、半七は「こんな稼業の者にはめずらしい正直な淡泊した江戸っ子風の男で」、「誰に対しても親切な男であった」。茂七も同じように、助けを求めてくる人には援助の手を差し伸べる。「半七捕物帳」の第二回「石灯籠」において、半七は「岡っ

<sup>24</sup> 宮部みゆき『初ものがたり』PHP研究所、1997年

<sup>25</sup> 本稿に引用されている「半七捕物帳」のテキストは、すべて光文社の文庫本「半七捕物帳」シリーズを参照している。

引とか手先とかいうと、とかく世間から蝮扱いにされる」と語っているが、実際半七も茂七も町人の味方として描かれている。このように初登場のシーンを比較してみると、二人の人物像にある類似性が明確に読み取れる。

人物像だけではなく、『本所深川ふしぎ草紙』には、「半七捕物帳」シリーズと構造が共通しているエピソードもある。それは宮部の「消えず行灯」と、「半七捕物帳」の「奥女中」である。「奥女中」のストーリーは以下のものである。江戸のある大名屋敷の奥方は、娘を失った傷心のため、毎日「姫の名を呼んで、どうぞ一度逢わせてくれと泣き狂う」ようになっていた。屋敷の用人と奥女中たちは、「奥方のお気も少しは鎮まろうかということ」を考えて、その娘とよく似ている少女を探し出し、屋敷まで誘拐してきて偽の姫に扮させることを計画した。その誘拐された少女はお蝶という茶店の美しい娘である。屋敷の人たちはもともとお蝶を誘拐してまた家に返すことを繰り返すようにしたが、幕府の新しい触れで「諸大名の妻女も帰国勝手たるべしということになった」ため、彼らはいよいよお蝶を国に連れて帰ることを願い出た。結末で、誘拐の原因が明かされ、お蝶と母は奥方に同情し、二人とも一緒に奥方と国に帰ることになった。

「消えず行灯」には、「奥女中」と同じく「偽の娘」をモチーフとして描いている。両親を亡くし、料理屋で働いて生活しているおゆうは、ある日、小平次という男から奇妙な話を聞いた。それは、市毛屋という足袋屋の娘のお鈴が失踪したことにつけ込み、お鈴と似ているおゆうを「お鈴に仕立てあげ、市毛屋から礼金をせしめる」ことである。おゆうはこの話を断ったが、礼金を狙っていた料理屋の店主夫婦はおゆうを恨み、彼女を店から放り出した。居場所がなくなったおゆうの前に、小平次がまた現れた。彼は、偽のお鈴を探すことは市毛屋の主人の依頼で、娘を亡くした妻を慰めるためであると告白した。おゆうは結局彼の話を聞き市毛屋に入った。しかし、その後、おゆうは市毛屋の主人夫婦の異常な関係性に気づく。「あの夫婦は、亡くした子どもを二人で悼むのではなく、その傷をお互いに深くしあって生きてきた」とおゆうは思う。最後に、おゆうは市毛屋を出て、茂七に送られて本所を離れる。

具体的な設定と趣旨が異なるものの、以上の二つの短編は明らかに同じモチーフを扱っている。このように、宮部は初の時代小説短編集において、愛読していた「半七捕物帳」に対するオマージュを、茂七という人物に託したともいえる。

ところが、宮部の小説には「半七捕物帳」シリーズと根本的な違いがある。それは、宮部が怪異を実体として描いていることである。

「半七捕物帳」シリーズの中で、不可解な怪談はたびたび物語の前半に出てくるが、そのほとんどは半七の推理と捜査によって論理的に解明される。「半七捕物帳」における怪異と反する近代性について、横山泰子はこのように指摘している。

『半七捕物帳』においては、聞き手・語り手という作中人物と読者が、ともに近代人として、江戸の怪談を通じて、前近代の社会における人々の行動や考え方に接するのである。わたしたち現代の読者は……当時の資料に接してみても、現代人にはどうしても感覚的にわからない場合がある。『半七捕物帳』では、私たちの目線に近い「半七」と「わたし」が媒介となっているため、江戸時代の怪奇的な事件に近づきやすい。<sup>26</sup>

綺堂自身が幕臣の子であり、その出身に由来した江戸に対するノスタルジーは、縄田一男の「半七捕物帳」考<sup>27</sup>を始めとする多くの先行研究に言及されている。「半七捕物帳」に描かれている様々な怪談も、綺堂の記憶にある懐かしい江戸風景の一部であろう。ただ、怪談をそのまま明治の読者に語っても、科学が急速に進展しつつあった時代では、読者にとって理解しにくい面がある。半七の科学的視座は、怪談をのちの時代の読者に伝わるための必要なツールになっている。

ところが、犯罪事件の捜査方法が大幅に更新され、科学技術が凄まじいスピードで進化している現代、宮部は時代小説の中で、あえて怪異を実の存在として登場させる。『本所深川ふしぎ草紙』では怪異を直接に描いていないが、『幻色江戸ごよみ』においては12編の中で6編が超自然の怪異現象を描いている。また、前述した「第三話 春花秋燈」と「第八話 小袖の手」の中で、宮部は書き手と聞き手の間にある、半七のような仲介的存在さえ排除し、怪談の手法を直接に用い、怪異に強いリアリティを与えた。

このような手法は、迷信深い人々が生きた江戸に対するある種のノスタルジーといえるだろうか。答えは否である。従来の時代小説家の中には、日本の古典文化に心酔し、自ら研究していく人も多いが、宮部みゆきはそのような作家ではない。むしろ、自ら作品に懐古趣味を見出す可能性を否定している。1995年に行った対談を例として挙げると、彼女は自分の時

<sup>26</sup> 横山泰子「第四章 半七親分、怪異を語る」『綺堂は語る、半七が走る 異界都市 江戸東京』教育出版社、2002年、pp.139-140

<sup>27</sup> 縄田一男「『半七捕物帳』考」『専修国文』第39号（1986年9月）、pp.135-154

代小説と現代小説の構想の違いについて、「単に素材ですね。たとえば、カード破産のことを書こうとすれば現代で、忠臣蔵に興味があったらこれは時代もの」と明言している<sup>28</sup>。2013年のインタビューにおいては、彼女はさらに「アウトプットは時代小説でも、根っこは現代ものと同じというケースも多い」と述べ、この考えは「私の作家としての限界かもしれませんが、逆から見れば個性でもあるので、大切にしたい」と主張している<sup>29</sup>。このように、宮部の時代小説の主題は、過去に対する憧れではなく、とりわけその時代背景によって表現できる題材にあることがわかる。

では、なぜ宮部は怪異の存在や不可思議な事象をあえて描こうとしているのか。以下では、前に言及した、宮部作品にある「よく少年少女の視点を用いる」という特徴を踏まえて分析したい。

もう一度「半七捕物帳」の第一回「お文の魂」を参照する。すべての物語は12歳の「わたし」がKおじさんの話を聞くところから始まる。その後、「わたし」は成長し、22歳になったところでようやく半七と出会う。語る老人と聞く子どもの構造は、歴史の伝承を意味するモチーフとして読める。「わたし」はKおじさんから半七のことを聞き、また半七の話から過ぎ去った江戸時代を感じる。このような間接的な語りは、当然ながらこの作品当時の読者の目線に合わせるためであろう。それだけではなく、語りの中にしか存在しない江戸の風情から、取り戻せない時代に対する綺堂の郷愁も読み取れる。

一方、よく少年少女の視点を用いる宮部の作品においては、語られた過去より、主人公の体験こそがストーリーの中心になっている。『本所深川ふしぎ草紙』に収録されている「馬鹿雑子」が一例として挙げられる。この短編の主人公は、茂七の姪子として設定された少女・おとしである。彼女は悩みを相談しに茂七を訪ねた時、その家でお吉という少女を見かけた。お吉には精神的な病気があり、毎日異常な妄想を繰り返している。おとしはお吉の狂気を理解できないが、結局、狂ったお吉は意外にもおとしの命を救う。この短編の中で、茂七はおとしの伯父とはいえ、最初と最後にしか登場していない。ストーリーの中心は、恋に悩む二人の少女にある。おとしは、恋人の浮気を疑い、悩んでいる。お吉は、縁談の相手に「きれいだと思えません」という理由で断われ、その衝撃で気がふれたのである。おとしの悩みは最後円満に解決されるが、お吉は依然として狂ったままである。このように、お吉の身にふりかかった怪異のような精神病は、同じく恋に悩む少女のおとしの目を通じて、読者によりリアリティを感じさせる。

もう一つ例を挙げると、『幻色江戸ごよみ』の「第七話 だるま猫」は、15歳の少年・文次を主人公とする短編である。文次は、子どもの頃に父の虐待を受け、さらに両親を亡くしたあと親戚にも冷たくされていた。苛酷な環境に耐え、彼は火消しの夢を追いつづけていた。しかし、火消しの下っ端になり、本物の火事場と出会った途端、彼はその怖さを知った。自分の臆病さに悩んでいるところ、彼はかぶれば恐怖を感じないというだるま猫の頭巾と出会う。このストーリーの前半は、怪談というより、一人の少年が夢を追う成長物語として読むのがふさわしいだろう。文次の夢に対する執念とその挫折が、小説の中で詳しく描かれている。そのため、夢を叶えるだるま猫の頭巾が主人公の期待を応えるものとして、不自然さなくストーリーに登場してくる。

「半七捕物帳」シリーズの中心は、歴史としての半七の記憶である。彼の語りの中には様々な怪奇現象が登場し、その怪談の本質は、江戸風俗をよりリアルに現代人に伝えるための道具であった。宮部は、半七の語りの構造を継承している一方、怪談を歴史としてのみ語る手法に囚われず、そこに少年少女の視点を取り入れている。少年少女は自ら不可解な現象を体験し、その体験によってさらに成長していく。変化する主体を描くことは、まさに宮部の作品がノスタルジックではないことの反映といえる。子どもと成人の間にいる少年少女は、中間的な存在といえ、様々な可能性を表しているモチーフとして読み解ける。成長し、変わり続けていく主人公の目線を通じるからこそ、不確かな存在である怪異は、作品の中で現実のものとして成立しえる。このような構図は、宮部の怪談に対する現代人的な認識を反映していると考えられる。実話怪談という言葉も生み出した現代の日本において、怪談はすでに歴史的な語りとしてだけではなく、主体の体験談としての性質を帯びている。宮部は綺堂の伝統に学びつつ、現代の動向も鋭く感じ取り、その双方を自らの作品において融合したといえる。

## おわりに

以上において、宮部の初期の短編集『本所深川ふしぎ草紙』と『幻色江戸ごよみ』を研究対象として、岡本綺堂の「半七捕物帳」シリーズを参照し、後者の前者に対する影響とともに、その比較から見えてくる宮部の独自性を論じてきた。

江戸の様々な芸能に親しんでいた綺堂は、怪談を語ることに魅了された。そのため、彼は半七に怪談を語らせ、不思議な

<sup>28</sup> 縄田一男、宮部みゆき「ぶらっと、大江戸二人散歩」『大江戸切絵ぶらり切絵図散歩』PHP 研究所、1995年

<sup>29</sup> 宮部みゆき、末國善巳「翻訳調の文体で江戸ものを書いた岡本綺堂に近づきたい」『文蔵』第89巻（2013年3月）、pp. 36-41



話を通じて江戸の風情を後世に伝えている。その「聴覚型」といえる綺堂の怪談の構造は、宮部の初期作品に継承されている。ストーリーの中で細かく描かれている音を媒介として用い、読者は耳の感覚を通してストーリーを理解する。さらに、語りの音声と聞くことをより強調し、語り手が直接に読者に話しかけるような作品もある。そのほか、半七と『本所深川ふしぎ草紙』に登場する茂七に見られる人物設定の類似点と、綺堂の「奥女中」と宮部の「消えず行灯」に描かれている共通のモチーフから、宮部の作品における綺堂の影響の大きさが読み取れる。

宮部は一方、綺堂の伝統的な怪談文学を継承しながら、現代人の感性で、怪談の描き方をさらに発展させたと考えられる。少年少女という中間的な存在の目を通じて、不確かな怪異にも合理性を与え、実の存在として描き出した。同時に、成長していく少年少女たちを主体にすることによって、怪談を主体の体験に転化する。これは、江戸の怪談をノスタルジックにはしない、現代人ならではの試みといえる。これは宮部の初期の短編集だけではなく、その後の時代小説にも綺堂の影響が反映されていると思われる。それらの作品についての分析は今後の研究課題としたい。